

読書の楽しみ



株式会社 松本コンサルタント

宮 住 勝 彦 MIYAZUMI KATSUHIKO

建 設 部 門

読書が好きになったきっかけは父の影響が大きいと思う。

小学校の低学年の頃、春休みや夏休みになると父は本をたくさん買ってきてくれた。主に歴史上有名な人物の人となりを描いた「偉人伝記」で、読み終わると本の最後のページに感想を書きなさい、と言われた。

父には常々「読書は心の栄養だ。本を読むことは、自分が体験できないことを文字を通じて学ぶことだ」と教えられた。

学生時代は夏目漱石や芥川龍之介等のいわゆる純文学を読むことが多かったが、社会人になってからは、司馬遼太郎や海音寺潮五郎、吉川英治等の歴史小説を読むことが多くなった。特に、司馬遼太郎は大好きな作家で、司馬の作品はほぼ読破したと思う。10年以上前になるが、東大阪市にある司馬遼太郎記念館を訪れ、司馬の膨大な蔵書に圧倒されたことを今でも鮮明に覚えている。因みに記念館は建築家安藤忠雄の設計であり、建物を見に行くだけでも価値がある。

司馬は戦車の搭乗員として内地で終戦を迎えた。その経験から、「日本はなぜ戦争へと突き進んでいったのか」を生涯のテーマの一つとして執筆活動をしたが、昭和の戦争を描いた作品は見当たらない。ただ一つ、昭和14年に起こったノモンハン事件を描くべく資料収集をしていたが、遂に上梓には至らなかった。おそらく、書けなかったのであろう。

司馬は平成8年に72歳で急死したが、その数年前に徳島で開催された講演会を聞きに行く機会があった。

その中で司馬は、「四国生まれの人物を主人公にして書いた小説には、高知の坂本龍馬を描いた『竜馬がゆく』、愛媛の秋山好古・真之兄弟を描いた『坂の上の雲』、香川の空海を描いた『空海の風景』がありますが、徳島生まれの人物を描いたものはありません。ただ、淡路島生まれの高田屋嘉兵衛を主人公にした『菜の花の沖』という作品を書いています。江戸時代淡路島は阿波藩の一部だったので阿波生まれということで許していただきたい」と語っていた。司馬の人柄がうかがえるエピソードである。

それと並行して、松本清張や森村誠一等の推理小説も読むようになった。

松本清張は「点と線」や「ゼロの焦点」、「砂の器」等が有名であるが、短編小説「或る『小倉日記』伝」で芥川賞を受賞している。彼の作品もほぼ読破したが、私は短編小説が優れていると思っている。文庫本で全6巻の短編小説集が刊行されているので、興味のある方は是非お読みいただきたい。

森村誠一は私が社会人になったころ、「人間の証明」がベストセラーとなり映画化されたため、一躍有名になった。巧妙なトリックを駆使した作品も面白いが、私は赤穂浪士の討ち入りを違った視点から描いた「忠臣蔵」をお勧めしたい。

最近特にはまっているのが社会派ミステリーというジャンルで、いろいろな作家の作品を読んできたが、以下におすすめの作家を何人か紹介してみたい。

○池井戸 潤

「下町ロケット」で直木賞を受賞した作家。元三菱銀行の社員。

半沢直樹シリーズがヒットし、テレビドラマ化され「倍返し」で一躍有名になった。

どれを読んでも面白いが、私は「空飛ぶタイヤ」をお勧めする。

運送会社の社長が自動車メーカーのリコール隠しを暴いていくミステリーで、映画化もされている。

そのほか、「陸王」「ルーズベルトゲーム」「ノーサイドゲーム」等も面白い。

最近出版された作品では、「アルルカンと道化師」がお勧めである。

最新作の「ハヤブサ消防団」は、テレビドラマ化された。

○柚月 裕子

子育てが一段落してから「小説講座」で勉強して作家になった経歴を持つ。

風変わりな検事が事件を解決していく「検事」シリーズや「孤狼の血」シリーズが有名。

彼女特有の謎解きテクニックの世界があり、どれも面白く読める。

「パレートの誤算」、「蟻の菜園」、「臨床真理」、「盤上の向日葵」、「ミカエルの鼓動」等様々なジャンルをテーマとした作品は読者を飽きさせない。

最近、「合理的にありえない」がテレビドラマ化され話題となった。

○知念 実希人

東京慈恵会医科大学出身の医者。

型破りな女医、天久鷹央が難事件を解決していく「天久鷹央の推理カルテ」や「祈りのカルテ」等医学をテーマにした推理小説を多く上梓している。

最新作に「ガラスの塔の殺人」、「真夜中のマリオネット」、「機械仕掛けの太陽」がある。

○中山 七里

小中学生でシャーロック・ホームズやエラリー・クイーン、横溝正史等の有名推理作家の作品をほとんど読みつくしたという推理小説好き。

ファンだった推理作家、島田荘司のサイン会に行って小説家を生で見て、小説を書こうと思ったという変わり種。

少年院上がりの弁護士が難事件を推理していく「御子柴礼司」シリーズや、法医学教室を舞台にした「ヒポクラテスの誓い」シリーズがお勧めである。

○新川 帆立

30 歳を過ぎたばかりの新進気鋭の推理作家。

東京大学法学部卒業の弁護士でプロ雀士でもある。シカゴ在住。

デビュー作の「元彼の遺言状」がいきなりテレビドラマ化され、一躍有名になった。

次作の「競争の番人」も続いてドラマ化された。

「倒産続きの彼女」、「先祖探偵」等どれを読んでも面白い。

最後にもう一人お勧めの作家を紹介したい。

私はもともと歴史に興味があり、特に日本の歴史に関する本をよく読んできた。

日本史にも歴史の転換点と言われる時期がいくつかあり、大化の改新（乙巳の変）、源平合戦、建武の新政、戦国時代、明治維新等がそれにあたる。こういった時代には様々な個性あふれる人物が出現するため、たくさんの歴史小説作家の本が出版されている。先ほど触れた司馬遼太郎もその一人である。

それとは別に、歴史を客観的な事実として捉えたいいわゆる歴史書も面白い。

私がお勧めするのは、井沢元彦の「逆説の日本史」シリーズである。

もともと週刊ポストに連載中の記事で、現在 27 巻（韓国併合と大逆事件の謎）まで出版されている。

歴史的史料を鵜呑みにすることなく、史料の宗教的呪術的側面や日本人の言霊信仰等を考慮に入れた史料解釈による歴史観は慧眼であると思う。

10 年ほど前までは読みたい本を書店で購入していたが、書斎が本であふれるようになり最近専ら市立図書館を活用している。

読みたい本を新聞等からリストアップし、図書館のホームページで予約して読むことにしている。貸し出し中の本は、貸し出し予約をするとメールで知らせてくれるので大変便利である。

これからも読みたい本をいろいろ発掘しながら、読書を生涯の楽しみにしたいと思っている。